

## モンゴルあちらこちら ——草原だけではない国の“今”——

岡田 久美子

渋谷は松涛に近い在日モンゴル国大使館の玄関ホール。書架には、カラフルなパンフレットがいろいろ並んでいる。馬頭琴のコンサートや、現地の騎馬トレッキングツアーなど、モンゴリアンブルーの広い空を背景に、緑の草原に家畜を配した構図のものが多い。中にはMIAT（モンゴル航空）のように、日本の角界で活躍中の力士たちの姿を写したものもあるけれども。

どうやら“モンゴル”から連想されるものといえば、一般には「草原」が大勢を占めるようだ。

だが、実際に此の国をこれ迄に再三訪ね、延べ40日間ほど滞在してみた限りでも、国内各地でかなり多彩な自然環境に接することが出来た。

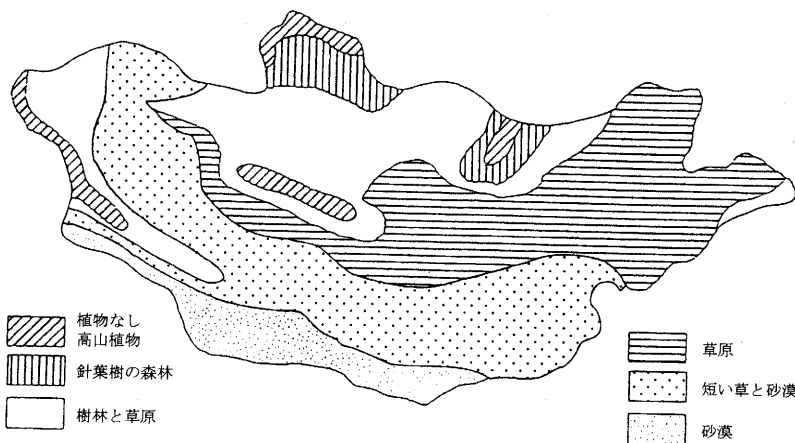
我がの間には幾つかの共通点がある。先ず、身体的特徴の酷似。文字は旧ソ連の傘下時代にキリル風のもの押し付けられたが、今は縦書きの伝統文字が毛筆による「書」と共に、復活されつつある。道徳観では、昔の日本を彷彿とさせるようなことが、特に敬老や子供への躰の面で見受けられる。そして、アジアの中でもひととき親日感が強い。

しかし、大きな隔たりもまた少なくない。例えば、内陸国という位置。人口密度の極端な疎。「物欲」に恬淡。隣接する両大国からの支配。経済活動の主体は、自然と共生する「遊牧」。社会主義の体験。計画経済から市場経済への移行……などなど。

### 近くて遠い国

2002年春から、成田——ウランバートル間に直行便が就航し、わずか4時間半で到達出来るようになった。時間的距離が短いばかりでなく、彼

社会の成り立ちが違えば、その価値観にも差異が生ずるのは当然である。従って、善し悪しを論ずるのではなく、相互に認め合い、理解を深める努力を惜しまないことこそが、その距離感を縮める基本となるものであろう。



出所 Physical Map of MONGOLIA から一部改変

植物分布図

## 首都 ウランバートル

国土の中央よりやや北東に位置するウランバートル市は、周囲を聖山ボグド山などの低い山地と、なだらかな丘陵に囲まれている。此处は北へ向かうトゥーラ川が貫流する盆地で、標高は1350m、モンゴル高原上に発達した都市である。

内陸なので気温の年較差は大きく、約40℃に達し、1月の平均気温は-20℃を下回る厳しい寒さとなる。だが年降水量が300mmにも満たない乾燥した気候なので、雪は多くない。

人口は、2004年の統計によれば約90万人ほどだが、実際には100万人を大きく越えていると推測される。

市内には社会主義時代に造られた高層アパート群があり、手入れの程度にもよるが、かなり老朽化の目立つものも多い。一方では、地域によって少数ながら瀟洒な近代的マンション風の集合住宅が見られるところもある。

市の都市計画局長によると、急激な人口集中に伴う諸問題の解決が先で、これ迄モンゴルには無かった土地の私有や使用権を勘案した都市計画は、先送りの状態を余儀なくされているという。

住居、学校、病院、駐車場、上下水道、ゴミ処理施設など、市民の居住環境の整備が、人口増加に全面的に追いつけないでいるのだ。

就中、問題なのは周辺の所謂“ゲル地区”。

市の人口の約30%が暮らすこの地域は、多くは居住には不適當な周辺の斜面をそのまま占拠して、勝手にゲルを造ってしまっている。ゲルは草

原を移動してこそ、その機能が発揮出来るし、その形も周辺に溶け込んでいるが、定住には全く向いていない。しかし比較的安値でそのキットが買えるところから、安易に頼ってしまうらしい。ライフラインとは無縁なので、光熱は薪や石炭を燃やす。従って盆地の地形では冬、特に空気が澱む。尤もこれは急増した外国製中古車の排気ガスにも因るのだが。大気汚染については、在モンゴル日本大使館でも、子供達への影響を大いに心配していた。また給排水の不備は、衛生上、非常に憂慮される。いずれにしても対策には巨額の資金を必要とするので、最重点課題から順次手をつけて行くしか方法はない状態のようだ。

一時期、日本でも“マンホールチルドレン”の存在が報道されたことがあったが、これは警察所管の専門の施設を作って対応がなされている。施設長によれば「子供達は置かれた環境に早く順応してしまうので、迅速な救出が必要」とのこと。また在日モンゴル大使館の書記官は、「日本からのセーターなどの提供は有難いが、それ欲しさに仲間入りしてしまう子供もいるので、出来れば大局的な支援をお願いしたい」と話していた。

市内には競技場、劇場なども数多くあり、市民や観光客を楽しませている。伝統文化には各種の優れたものがあるが、中でもモリンホール（馬頭琴）やヤトガ（12弦琴）などの弦楽器は多彩で、太鼓を伴う力強い馬頭琴の合奏の最後に、馬のいななきの音を高らかに響かせたのには感嘆した。

また特殊な発声法によって、同一人が張りのある高音と唸るような低音を出し、朗々と歌うホーミーは、聴衆を不思議な世界へ誘い、酔わせる。

手前はトゥーラ川



付近の丘から見たウランバートル市街

## 南部の砂漠地帯

製造国のロシアで、かなりの年数を既に経て来たと覚しき双発プロペラ機は、砂塵を盛大に捲き上げて南ゴビ空港に着陸。此処の滑走路は舗装されていない。時には馬が闊歩していることもあるらしい。目の前が白いゲルの並ぶツーリストキャンプ。つまり、タクシーでホテル迄乗り付けたのと、同じ感覚と言える。

到着してほどなく、俄に風が強くなって来た。ゲルを覆う重い帆布が、バタバタと激しく音を立てる。昼食を摂る別棟のレストランへ向かう僅かな距離でも、風上に背を向けてウィンドヤッケのフードを抑え、腰を屈めながら歩く。午後の予定を心配したが、2時間ほどで収まった。

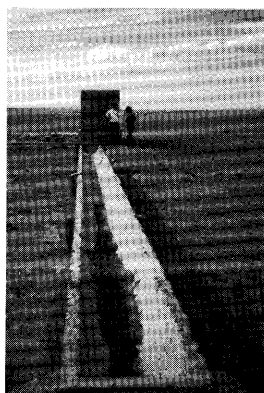
“ゴビ”とは「疎らな草の生えている土地」の意で、国土の約30%ほどを占める。此の場所も、アルタイ山脈から続くゴルバンサイハン山地を南に望む他は、ぐるりと地平線。“ザク”と呼ぶ棘のある草がところどころに生えている礫砂漠だ。道路は定まっていない。走れるところなら、何処を通ろうが構わない。走行中の自動車の存在は、昼間なら移動する砂煙で、夜間なら移動するライトで、それと判る。四輪駆動車で走っていると、動物の白い骨に出会うことも珍しくない。また遙か彼方には、町や湖の蜃気楼も見える。吹き溜まりに当たるのだろうか、場所によっては小規模な砂丘があって、美しい風紋を見せている。

砂漠という厳しい条件のところだが、此処にも遊牧を営む人々がいる。何戸かで井戸を共有し、井戸の傍らには家畜の大きな水飲み場と、小さな野菜畑。小型の風力発電機を備えたゲルもある。

夕刻、突然だったが一つのゲルを訪ねた。家畜約300頭のうち、山羊がほぼ半数で、あとは駱駝、馬、羊などを飼っている。夫は運転手の仕事に就き、6人の子供は町へ出たり、近くのキャンプで働く。従って家事と、昼間の家畜の世話は全て主婦の肩に掛かる。彼女の起床は5:00、就寝は23:30。暗くなったゲルには小さな蠟燭が1本。床には寝具類が見事なまでにキチンと畳まれている。カーペット上に自家製の乳製品を並べ、更には貴重なトマトや胡瓜までも勧めてくれた。

下の写真は、数家族が共同出資して掘った井戸。南ゴビでは、家畜の餌になる草はまばらにしか生えていないから、ゲルとゲルとの間隔を大きく空けている。つまり家畜1頭当りに広い面積を確保しておく必要があるのだ。従って、井戸までの距離も遠い。家畜の群れを連れて行き、揚水のバルブを開けて細長いコンクリート槽に溜め、順番に飲ませてまた連れ帰るのだが、これだけでも毎日かなりの時間と労力をと費やす。

前述の“ザク”は、深い地下茎を持つ乾燥に強い植物であるが、葉が家畜の餌となる一方、茎も燃料として利用されるので、濫伐のため減少しつつある。また、中国で言う“砂塵暴”、即ち地表が砂で覆われてしまつて植物が育たなくなる被砂現象が、此処でも加速度的に拡がっている。加えて、2001年には寒冷被害にも見舞われた。



砂漠の中の井戸

次いで、南のゴルバンサイハン山地へ向かう。山に入る少し手前に、ドイツの学者の協力を得て作られた博物館があり、南ゴビの動植物や鉱物が多数展示されていて、興味深い。

氷河の残る“鷲の谷”への入り口に駐車場があって、自動車はそこ迄。馬に乗り換える。地名通り猛禽類らしい大きな鳥が、上空を悠然と旋回中。立派な角を持った野生の羊が、切り立った崖の上から此方をしきりに眺めている。流れに沿った小径は、濡れた岩の上を辿るので滑りそうだが、馬は慣れたもの。標高2000mを越えるこの辺りの急斜面でも、放牧のカシミヤ山羊やヤクを少なからず見掛けた。途中、デール（民族服）姿の青年が徒歩で追いついて来て暫く同行したが、ほどなく飛ぶような速さで先に行ってしまった。

## 北部の森林地帯

以前、中国の内モンゴルの草原で、キャンプファイヤーをしようと言うので行ってみたら、薪ではなくて巨大な石炭の塊が、真っ赤に燃え盛ってゴロンと転がっていたのには吃驚した。

此処モンゴルでも、中部や南部の遊牧民の使用する燃料は、アルガリ(家畜の糞を乾かしたもの)が普通。ところが北部ではカラマツが豊富なので、ツーリストゲルでも惜しげなく薪ストーブを焚いていた。北部にはロシアのタイガに続く森林が分布し、林間には毛皮獣も棲息する。緩やかにうねる丘陵地の森林は、下の写真に見るように、どれも北斜面に限られているのが面白い。理由は至って明快で、樹木の生育に必要な湿度が、南斜面よりも保持され易い故に他ならない。

モンゴル第二の湖で、セレンゲ川によってシベリアのバイカル湖と繋がるフブスグル湖。琵琶湖の約4倍の面積を持ち、その大きさから現地ではノール(湖)ではなく、ダライ(海)と呼ぶ。北部の山地にあるので夏でも涼しく、針葉樹林に囲まれて「モンゴルのスイス」と称されている。

湖畔の緩斜面には、夏の間ツーリストゲルが並ぶ。建材の豊富さから、家屋や貯蔵庫、家畜小屋にもログハウス風が多いのだが、敢えてテント式のツーリストゲルにこだわるのは、冬季の撤収のためと、宿泊客の要望に応じてのものであろうか。ゲルから見下ろす湖面は、日の出には霧が幻想的に覆い、日没には夕陽が真紅に染め上げる。湖の水質は、そのまま飲用に値するほど良好で、釣り上げた魚もまた美味。夏の終わりには、水辺で各種のベリー類が、色鮮やかな実を結ぶ。

だが夏の“楽園”の雰囲気は、冬には一変する。シベリア気団の発生地に近いだけあって、-40℃を下廻る日も少なくない。湖には厚い氷が張り詰め、家畜は烈風を避けて“冬囲い”の中に移る。家畜の種類は南岸では寒さに耐えるヤクが、北岸では更に寒冷に強いトナカイが一般的となる。

ゲルから少し登った丘では、8月下旬でも、足の踏み場に迷うほど一面にエーデルワイスが咲いている。その丘の反対側に、ヤクを飼う一族が住んでいるというので訪ねてみた。チベットで見たヤクは殆どが黒い毛だったが、此処のヤクは白や灰色のものが多く、ひときわ目立つ、立派な種ヤクがいて、子供の一人が囲いの柵を足場にひらりとその背中に乗った。これは絶好の被写体とシャッターを切ると、他の子供ばかりか大人迄も競って乗り、背中に溢れそうになってしまった。

此処でも男手は夏の間はキャンプへ働きに行くので、女達が干し草作りから薪割り迄もこなす。また長い冬に備えての保存食作りにも忙しい。チーズを堅く干し固めたものは、現金が必要になれば馬に一鞭当てて町の市場へ持って行けばよい。馬乳酒を手製の道具で蒸留したアルコール度の強い酒アルヒは、寒さの中の生活には欠かせない。

フブスグル湖には、ウランバートルから約90分のフライトの後、相当な悪路を100kmほど、四輪駆動車で揺られて行かなければならない。しかし途中の峠から見はるかすセレンゲ川の風景は、まさにモンゴルならではの雄大なもの。日本の著名なカヌーイストが、この川をゆったりと下って行く映像をテレビで見て、その情景が記憶に刻み込まれていた。悪路の途中から、それと寸分違わぬ景観を目にした時の感動は、今も忘れられないものとなっている。



丘陵地の北側に繋る森林

## 中部の草原地帯

モンゴルで最も豊かな土地と言え、やはりこの国土中央部分の草原地帯である。そしてその豊かさ故に、古来争奪の地となって来たところでもある。また、遊牧民は固定した宮殿や墓所とは本来無縁なのだが、エルテネゾーという立派な遺跡が此処にはある。108の白い仏塔に囲まれた壮麗なそのラマ教寺院は、十数年前には草原の中に浮き上がって見えたものだったが、今は周辺一帯にコンバインの稼動する小麦畑が広がり、巨大な貯蔵エレベーターも建てられている。

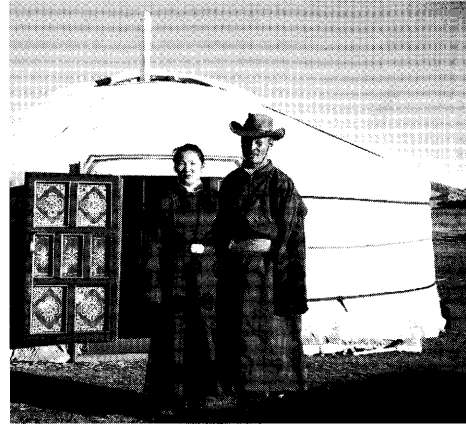
また菜食の習慣に乏しかった昔と違って、人々の野菜の摂取量が増えた為に、胡瓜などのハウス栽培も始められている。だが、まだ試行錯誤の段階で「トマトと相撲をとっている」と言うので、「え?」と聞き返したら、それは「一生懸命取り組んでいる」という意味なのだった。

土地が豊かであれば、家畜の密度も濃い。家族を単位として点在するゲルは、近隣に親類縁者を配し、血縁、地縁、共に強固な関係を築いている。学齢の子供達は、寄宿舎付きの学校に入るか、町の親類に預けられて週末だけ両親のゲルに戻る。

1棟のゲルで息子の結婚式があった。早朝、親類が集まって、親のゲルの近くに新夫婦のゲルを建てる。出入口は小さいから、主な家具類は完成前に収めてしまい、2時間足らずで出来上がり。ラマ教の僧侶が町からオートバイで到着し、我々から見れば至って簡単な式が済めば、いよいよ皆の待っていた披露宴。大勢で前日から用意したご馳走が草原に並び、歌や踊りや、果てはモンゴル相撲やミニ競馬まで出現することもあるという。老人も子供も、誰もがとても楽しく嬉しそう。

写真のように、晴れの日には民族服の美しいデールを着る。材質は絹の紋織で中々豪華なもの。袖が異様に長い、通常は折り返しておき、乗馬の際に伸ばし、その中で手綱を握る。騎乗に便利なように、両脇には深いスリットもある。飽くまでも馬との生活を前提としている衣服なのだ。普段着にはもちろん化繊を使用するし、若者はジャージやジーパンも好んで身につけている。

チングスハーンの昔から“馬”はモンゴルの人々にとって無くてはならないものだった。



新しいゲルの前の新郎新婦

ウランバートルの近代的なアパートに住む男性も、田舎に自分の持ち馬を預けていて、部屋には立派な鞍を飾り、且つ磨き、「休日を待ち兼ねて乗りに行くのが楽しみだ」と話していた。

しかし、中部のゲルでは、多くの真新しいオートバイが目につく。ピカピカの“マシン”の魅力は、特に若い世代には抗し難いものようだ。日常生活が近代化され、便利になって行くのはもちろん結構なことなのだが、自然とのバランスの面で、かなりの疑問もある。

試みに、馬とオートバイとを比較してみよう。馬は、乗用や運搬用の役目を果たす他に、馬乳酒は夏季の大切な食べ物（飲み物ではない）となる。肉、革、毛（尻尾、たてがみ）、そして糞も燃料として利用価値が高い。しかも餌は天然の草であり、仔馬は必ず生まれて来る。

一方オートバイは、その取得に多くの出費がある上に、使用と維持にはガソリンその他の費用も掛かる。馬のようないろいろな付帯価値は無く、最後は自然に還らぬ屑鉄となってしまふ。

かなり馬の肩を持ってしまったが、これは親と子が轡を並べて疾駆している何とも格好いい姿に魅せられた、部外者の戯言と片付けて欲しくない。

遊牧の家畜を大切に、上手に自然と共生して行く。其処にこそ、モンゴルから日本が学ぶべき“家族”と“環境保全”の価値観があると考えている。

おかだ くみこ 3回生  
読売・日本テレビ文化センター 講師